

# 柿生文化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話：070-1503-6401/044-988-0004

<https://kakio-kyoudo.jp.org/>

第 211 号

シリーズ

杉山神社 5

## 新たな視点で杉山神社を考える

岡田 誠治（郷土史研究家）

### 〔2〕新たな視点とは何か

#### (1) 新しい視点による杉山神社研究（前編）

「本祠はどこか」「原初の祭神は誰か」「式社はどこか」「何故杉山というのか」、という 4 点にこだわらない杉山神社研究の諸説を要領よく簡潔に伝える論説があります。

小俣昭「杉山神社を考えるー過去 30 年の研究実績の紹介ー」（『大倉山論集第六五輯』平成 31 年 3 月）がそれです。（以下小俣「研究実績紹介」と表示）

副題にある通り研究実績の紹介なので、どなたがどんな論を展開したかを要領よく整理されています。どの論考も重要な指摘を展開していますので、要点を紹介します。（掲載に当たっては小股先生の承諾を得ております。）

#### 【要約】

#### 一 「関東地方の神社分布からみた杉山神社」

##### (一) 佐野和史「関東地方の神社分布」

- ・中世・・・武士団により分布域が拡大。
- ・中世後期から近世初期・・・各種宗教活動により勧請・祭祀される社が出現。この時期の神社の成立過程を考察することも重要視すべきだと提言。

##### (二) 幸田優里「関東地方における地域的信仰分布」

- ・氷川神社や杉山神社などの信仰圏がそれぞれの川の流域に集中している。水路交通によって信仰が展開した。各信仰は地域性が強く、その地の人々の生活と共に展開したと考察。

##### (三) 中西望介「杉山神社のなぞ」

- ・東京湾の機能の重要性に着目。杉山神社の分布には河川・海上交通が関係していると説明。
- ・東京湾と河川を介した地域開発や地域の纏まりは、古代にまで遡ることが想定出来ると指摘。

#### 二 考古学から見た杉山神社

##### (一) 坂本彰「なぞの杉山神社」

- ・関東地方の神社は地域と深い関わりをもつ小神社の集合体で土着神であり、杉山神社もその中に含まれる。勝田町の杉山神社は勝田原遺跡など周辺に集落跡を持つ遺跡が複数あり、式内杉山神社の有力候補である。論社の茅ヶ崎社、西八朔社、吉田社には基礎となる集落が判明していないことを指摘。

##### (二) 久世辰男「古代の「郷」をきわめるー武蔵国都筑郡を例にー」

- ・「武蔵国都筑郡粉山神社」はどこかの「郷」に鎮座したか、古代集落の分布と分析による解明を試みる。杉山神社が鎮座していた「郷」を検討する基礎資料になると思われる点を指摘。

##### (三) 坂本彰「鶴見川下流の低地遺跡ー鶴見神社境内遺跡の出土遺物ー」

- ・「本遺跡が鶴見川河口部に位置することから、付近に東京湾から鶴見川水上交通の出入り口としての機能（港）があったことが充分想定される」と指摘。

#### 三 中世の杉山神社

##### (一) 中西望介「中世後期の杉山神社信仰と真言宗の展開」

- ・近世における杉山神社の別当寺は真言宗寺院が多く、かつ本地仏に不動明王が多いことに注目して杉山神社と真言宗寺院、真言密教の結びつきを指摘し、この関係が中世に遡ると考察。
- ・都筑郡では金沢称名寺から発した真言密教の教線拡大が活発であった。
- ・杉山神社信仰の背景に、真言密教とそれを支持する北条氏、守護代、国人層等の存在を明らかにした。

##### (二) 「中世諸国一宮制の基礎的研究」

- ・一宮から六宮の分布は、武蔵七党などと呼ばれる党的武士団の分布に強く影響されていた。一宮→横山党、二宮→西党、三宮→野与党・足立氏、四宮→丹党・猪俣党、五宮→児玉党、六宮（杉山神社）→横山党等。
- ・武士団の掌握のため国司らが一宮から六宮を選定した。

(続く)

シリーズ  
禅寺丸柿の歴史 21

## 近代における川崎市域及び横浜市北部地域での果樹栽培(21)

相澤 雅雄(都筑・橘樹研究会会員)

## 枇杷島市場へ視察

明治後期に禅寺丸柿の収穫量は最盛期を迎えて、出荷量も増加の一途をたどった。このため出荷先である京浜市場での荷余りを生じさせないように調節する必要があった。禅寺丸柿は甘柿のため干し柿として加工することもできないことから、どうしても新しい販路の開拓を目指すことが求められた。この危機意識を持ったのは、明治 30 年(1897)頃より奥羽地方のリンゴが東京に入荷し、多くの消費者は一斉にリンゴを買い求めに走った。このために柿実の消費が伸び悩んでしまった。あわせて相州片瀬一帯の蜜柑が京浜市場に出回り始めて、再び柿の売り上げに影響がでてしまった。この先、富有柿や次郎柿といった優良な品種が市場に出回れば、「本県を代表する柿は、禅寺丸柿である」などと言って安閑としていると、市場から追い出されることも想定された。神奈川県農会(以下「県農会」と略す)の危機意識は相当なものであったようである。そこで県農会は、柿栽培を行っている県農会員に対して、かつての紀州ミカンが温州みかんに駆逐されたと同様なことが起きる可能性があるという注意喚起を行った(『農事質問応答録』県農会 大正 6 年)。こうした状況下、明治 42 年(1909)以来都筑郡農会と柿栽培農家は県農会の仲介によって、禅寺丸柿を全国有数の大市場と言われた愛知県の枇杷島市場へ共同出荷を行った。この結果、相当な好収益をあげることができ各農家は大喜びとなった。この要因としては、同市場への事前視察、先方の問屋と都筑郡農会との契約条件、出荷条件、荷主を代表し一切の便宜を図る委員を置いて出荷に当たらせてことが挙げられる。これらについて、綿密な調整と具体的な行動マニュアルを作って対応したことが、スムーズな共同出荷につながったといえる。



絵葉書・賑わう枇杷島市場 筆者蔵

次に枇杷島市場へのお荷がどのように行われたかをその経緯を追ってみることとする。前述した通り、禅寺丸柿は荷余りを防ぐため京浜市場以外に販路の開拓を迫られていた。明治 42 年 6 月 28 日、県農会に県農事試験場の富樫常治技師と懇意にしていた枇杷島市場の問屋村瀬儀兵衛商店(愛知県清須市橋詰)の村瀬儀兵衛が訪問した。用件は、今年は関西一帯の柿が不作のため、どこでも柿を欲しがっている。関東は柿の成り番と聞いた。ついては味と格好が良い禅寺丸柿を是非とも一手に販売させて欲しい旨の申し入れであった(『神奈川県農会報』第 56 号 明治 43 年)。幸いなことに、明治 41 年(1908)9 月 23 日に東神奈川と八王子間に横浜鉄道(現・JR 横浜線)が開業していたことから、都筑郡内から遠隔地への物資輸送が可能となっていた。この横浜鉄道の敷設に当たっては、国は敷設計画をしている横浜の経済人に対して、単なる八王子方面の生糸を横浜へ輸送するだけでは許可しなかった。そこで横浜鉄道(株)は、生糸輸送に加えて沿線の殖産興業の発展にも寄与することを新たに敷設目的に盛り込んだ。これが認められてようやく国からの免許がおりたという経緯がある。

県農会は、都筑郡農会に対して枇杷島市場は将来とても有望であり、村瀬儀兵衛との取引も間違いのないからと大いに薦めた。これを受けた都筑郡農会は、明治 42 年(1909)8 月下旬に中里村下谷本の谷本眞司、寺家の金子錠吉、田奈村奈良の黒瀧時蔵、恩田の土志田佐助、柿生村王禅寺の森成三、鈴木伊三郎の 6 名を現地視察に向かわせた。この結果、同市場は大に見込みがあり、村瀬儀兵衛も確かな人物であったこともわかった。報告を受けた都筑郡農会では、早速この年の秋からの出荷が妥当だと判断した。特に共同出荷をすることで、京浜市場での荷余りを生じさせないことに加えて、生産者に相当な利益が見込まれることとなった。村瀬儀兵衛商店と都筑郡農会との特約契約も結ばれ、いよいよ明治 42 年秋から出荷する運びとなった。

(続く)



小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

時間割表から、読み方と書き方の習得のための時間が過半を占めていることも分かります。洋式算を習う算術の時間を除けば、寺子屋の教授内容と変わりません。ここにも問題がありました。江戸時代も明治時代も、まだ日本語という概念には至っておらず各地の地域言語が入り乱れていたのです。そのために発達したのが候文体による手紙文化でした。言語はバラバラでしたが、文字は共通だったからです。候文の手紙が読め、かつ書けるようになることが重要だったのです。明治時代も手紙文化を引継ぎ、話し言葉と書き言葉は相も変わらず別物だったのです。（続く）

明治9年の時間割表 お昼以外に休み時間なし

## 『文久二・三年王禅寺村御用留記帳』を読む — 6 —

飛田 三枝子(柿生郷土史料館専門委員)

坂下門外の変については、佐賀藩の史料『文久二正月十五日記』と『坂下門外の変・閤老安藤対馬守信正の記録』(斎藤伊知郎著)によると、1月15日は諸大名が將軍に拝謁する日のため、坂下門附近は家来や供の者で混雑しており、その中を登城する信正の行列は走っていたとある。当時は仮に事件があっても分からないようにするために、老中等の駕籠は常に「きざみ(刻み足)」といって駆け足だった。

その信正の駕籠に河本杜太郎が銃弾を一発撃って襲撃が始まった。しかし駕籠が走っていたためか弾はそれで家来の足にあたる。警護の者との斬り合いのなか、平山兵介が信正の駕籠に突き刺した刀は背当て布団のため、背中に突き疵を負わせたにすぎず、信正は駕籠から飛び出し、抜刀したまま坂下門内に走り込んだ。襲撃そのものは「煙草一服の間」という短時間に終わる。倒れた6人はそれぞれ懷に名前(変名)を記した「斬奸趣意書」を持っていたため、名前はすぐ判明したと思われる。

信正は直ちに幕府へ「坂下騒動公儀への届書」を出した。「今朝登城掛坂下御門下馬所前にて狼藉者鉄炮打ち懸け、七八人程・・左右より駕籠へ切掛け・・供方の者防戦いたし狼藉者六人討とめ、その余の者ども逃げ去り申し候、拙者・・少々怪我致し・・坂下御門御番所にて手当・・出血等もこれ有り候につき、ひとまず帰宅いたし・・」とある。

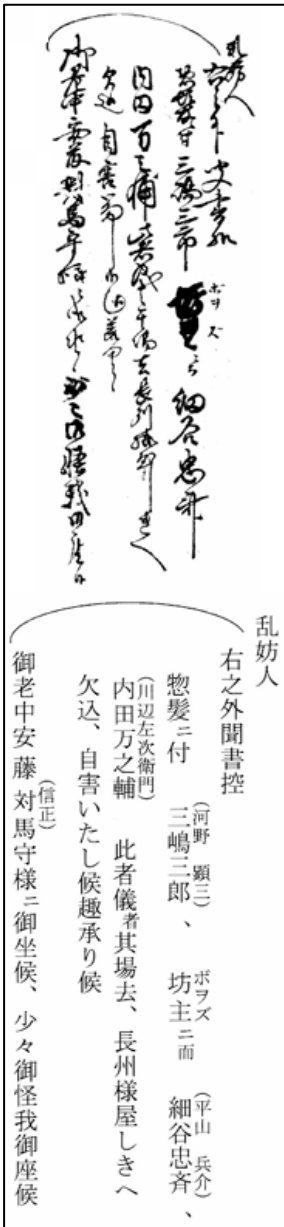
狼藉者が何人かは周囲に大勢の者がいたため分からなかったのだろう。そして「逃げ去り候者」の存在は、この届書が決め手になったのではないだろうか。逃亡者を捕らえるために急ぎの廻状を幕府は出したが、そこには襲われた役人の名と「坂下門」は書かれていない。それは事件の詳しい内容を民衆に知らせる必要は無いという幕府の考えを表しているし、故意に隠したとも思える。

「聞き書き」を書いたのは筆跡からみて名主文之丞である。彼の記述によって事件の真相は村人自身が求めたという状況が分かる。

襲撃に遅れた川辺左次衛門は、面識は無いが名前を知っていた桂小五郎(木戸孝允)に会いに桜田門近くの長州藩屋敷に行った。左次衛門と「対談」した小五郎は役向きの者へ相談するので暫く待つようにと言ったが、書面一通を残して左次衛門は自害した。6人の持っていた「趣意書」は幕府に取り上げられたが、左次衛門が残した書面「斬奸趣意書」は世に出ることになる。

自邸で疵の手当をして着替えた信正は再登城し、その後も勤めを続けたが4月11日老中職を罷免された。

(『文久二年・三年王禅寺村御用留記帳』は当史料館で販売中。千円)



『御用留記帳』 部分

柿生郷土史料館友の会  
102回カルチャーセミナー

## 学級の誕生

2024年6月、第92回カルチャーセミナーで、学校誕生への道と題して、教育の誕生を語らせてい

ただいた続きです。誕生した学校に、どのようにして現在のような同一年齢、同一学年、一斉教育という初等学校が誕生し、定着したのかを考えると、そこにはいくつかの先駆的試みがあり、そうした試みを参考に、学級制が誕生した系譜が想像できます。それはどのような試みだったのか、教育史の先達が解き明かしてきた事柄を、紹介させていただきます。

- ◆講 師 小林基男氏 (柿生郷土史料館)
- ◆日 時 1月25日(日)  
13時30分~15時30分
- ◆会 場 柿生郷土史料館 (柿生中学校内)  
特別展示室
- ◆参加費 無料 どなたでも参加できます

## 柿生郷土史料館 開館日のご案内 【参加自由、入場無料】

- ◎開館日 : 12月6・13・20日(土曜日) 1月11・18・25日(日曜日)
- ◎開館時間 : 午前10時~午後3時